様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	臨床心理士養成コース ／井上　和臣

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教育大学教員としての授業実践

本学の目的は，豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し，学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには，教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が，学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは，教員養成大学の教員として，本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか，これまでの取り組み状況を総括し，具体的に示して欲しい。

1．目標・計画

〇教師を目指す学生が受講する学部の授業のうち，単独で開講するのは，「学校精神保健学」である。これまでの取り組みを踏まえ，精神科医としての経験に裏打ちされた，実践的な「臨床の知」を提供できるよう尽力したい。児童青年期にみられやすい精神障害について，アメリカ精神医学会発行のケースブックにある具体的な症例記載を提示することで，受講生が卒業後に保育士等となったとき，直ちに役立つ知識を伝えたい。
〇大学院の授業は，臨床心理士養成コースの学生が対象となるため，学校現場の実践と直接関連することは比較的少なくなる。しかし，これまでの蓄積を生かして，「精神医学」「精神医学文献演習」においては，精神障害の生物・心理・社会モデルという視点を強調し，「心理療法研究」では，不登校やひきこもりなどに対する認知療法を理解するために，基礎的知識を教授し，あわせて実践演習を実施したい。

2．点検・評価

中間報告以降の授業について報告する。
〇大学院の授業「精神医学文献演習」においては，英語文献の講読を通じて，精神障害とくに発達障害の生物・心理・社会モデルという視点を強調した。「心理療法研究」では，不登校やひきこもりなどに対する認知療法を理解するために，基礎的知識を教授した。あわせて，実践演習「認知療法の7つのステップ」により認知再構成法の具体的な進め方を，受講者全員で実施した。
中間報告も含め，当初の目標はすべて十分に達成できた。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

〇学部学生の基礎学力の充実に不可欠な日本語を的確に読む能力を高められるよう，学部での授業に取り組みたい。
〇大学院学生に対しては，臨床心理士として主に保健医療福祉領域での臨床活動を将来実践することに向けて，当該領域での活動に資する認知療法・認知行動療法の具体的な適用法を理解できるように，主宰する「認知行動療法を学ぶ会」などへの参加を促し，事例に即した認知療法・認知行動療法の取り組みを提示していきたい。

２．点検・評価

中間報告においてすでに示したように，臨床例について症例検討を行う「認知行動療法を学ぶ会」などに参加の機会を提供した。

Ⅱ－２．研究

１．目標・計画

○認知療法に関する訳書の執筆に取り組みたい。「パーソナリティ障害の認知療法」という著書が昨年度末に出版できたので，これと姉妹編となる「パーソナリティ障害の認知療法（Beckら，改訂2版）」の翻訳を完成させ，出版を今年度の早い時期に実現したい。なお，翻訳は京都府立医科大学・徳島大学の精神科医と共同して実施したものである。

２．点検・評価

中間報告にある通り，翻訳が完成し，出版に至った。

Ⅱ－３．大学運営

１．目標・計画

○兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の副研究科長としての職責を全うする。
○各種委員会での職務を適切に遂行することで，大学の運営に関わることにする。

２．点検・評価

副研究科長として，構成大学間の連絡・調整・運営に関わった。あわせて，学内の委員会においても職務を遂行した。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

〇徳島県精神科病院協会の主催する社会生活技能訓練（SST）研修会は11年目を迎える。今年度もこれを継続し，県内精神科医療機関の看護師，精神保健福祉士，作業療法士などに対するSSTの実践的教育に積極的に関わりたい。

2．点検・評価

2011年度のSST研修会は終了し，11年間の成果を認められ，2012年1月には徳島県精神科病院協会から感謝状をいただくことができた。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

鳴門教育大学での最後の年となったが，連合大学院副研究科長としての職務を中心に，なすべきことはなした，と考える。